

いつもと変わらずに

## 津守 真

夏休みのあと、新学期を迎える前の晩、久しぶりの子どもたちとの再会を思い、心落ち着かずに過した。殊に今年は、夏休みになる前に私はイスラエルに旅行をしたので、あの子は、あの親は、どのような表情で学校にくるだろうかと、長い不在のあとの心もとなさを感じていた。しかし、それと共に、子どもたちや親たちのさまざまなき動きの中に再び身を置いたのしきをも覚え、たとえどんな予期し

ないことがあるうとも、自分もその中のひとりとなり、生きた人間として交わってゆこうと心の奥に覚悟をきめた。

夜の暗闇の中で自らに語ることは、昼間の光の中でたしかなものとなって展開することは、いつも経験することである。

翌朝、新学期最初の日、子どもたちは親たちと、次々に、前進的な活気にみちた表情で門から入ってくる。その間に、いつのまに

か、私もその中のひとりになっている。そして間もなく、子どもたちのざわめきと人の往きかいに、庭も室内も、いつもと変らぬ賑やかさに沸き立った。

いつもと変らない生活がくり返されるといふのは、人間の幸福の基本的要素なのだと思う。

だが、こまかいことをいえば、その中にも、いつもと違うことがどの子どもにもある。

Oくんは門からはいつてくるとき、母親につかまって、私をみて人みしりのようにためらう。私の方から近づくと圧迫感を与えるように思えて、砂場の縁に腰をおろしたままOくんと目を合わせる。Oくんが母親と共に近くまで歩いてきたとき、私は立って迎えると、私の手につかまって室内にはいつてくる。この前私カナダにいったときには、それまで私に親しんでいたOくんとの間柄を回復する

のに何週間もかかったが、今回は無事に、Oくんとの交わりを再開することができた。

Tくんも、門の外側でうろうろしていて、すぐに入ってこない。母親も赤ん坊を背負って、ゆっくりと見ている。私は木のかげから、半分目を合わせたりかくれたりしていると、自分から中に入って門をしめ、ひとりではいつてくる。

Kくんは、午後になって私をみつけると、いつものように砂場で私とひと遊びしてから、室内の滑り台でボールを下から投げて、上にいる私に受けとらせることをくり返す。これはもう何ヵ月も、Kくんが私と遊びはじめるときの仕方である。今日は最初に、いつものボールを滑り台の下から何度か投げて後、それを仕舞いにいつて、それから空気の抜けたボールを持ってきた。いつもと違う遊びをはじめると言うみたいである。次に、

両手に赤と黄の中位のサイズのボールをひとつずつ持ってきて、滑り台の下から何度も投げける。自分のと私のと二人分のボールを意識して運んでいるように思われる。何にでも、自分の力を精一杯に出して挑戦するようになっているKくんは、それから壁際につき重ねてある箱積木の一番上から、自分が抱えられるだけの大きさの積木を持っておりて、幾つか床につんでいった。自分に持てない大きさの積木になったとき、私をよびにきて、それをおろさせた。いつもと同じパターンで遊びが始まった。こどものエネルギーはその内容をかえている。

先学期の終りに、このKくんのことから「子どもの自己実現と保育者の自己実現」について、八月号に書いて以来、私は、これは逆のタイプの自己実現をする子どもに注目をする必要を感じていた。自分の力を精一杯

に出す場合を実の自己実現と言うとすれば、嘘の自己実現と言えようなタイプである。

前者の子どもが、挑戦する対象を見つけて、挫折しながらも保育者に助けられてそれを実現してゆくのに対して、後者の子どもは、何もしないことを楽しみ、人目につかない周縁から庭の真中で遊ぶ子どもを眺めたりしている。後者の子どもに対しては、おとなは皆の中にひきいれる試みに力を注ぎがちになるが、この子どもたちは、おとなの圧力を察知すると、どんな誘いをも拒否する。しかし、おとながその子どものあり方を、これでいいのだと思つて、一緒に片隅に坐っていると、静かで繊細な子どもの世界がこちらにも伝わって、世界が控え目に、違つて見えてくる。そういう子どもたちが、私のまわりに何人もいる。

Yちゃんはそういう子どものひとりであ

る。ところが、Yちゃんは、新学期の最初の日に、部屋の真中を歩いている。人をはつきりと見て笑う。いくらかふとったようでもある。夏休み中、よく食べたのだと母親は明るく笑う。相変らずぶらぶら歩くことが多いのだが、いきいきとした張りを感じさせられる。この子どもなりに、気持よく生きられる日が増すとよいと思う。

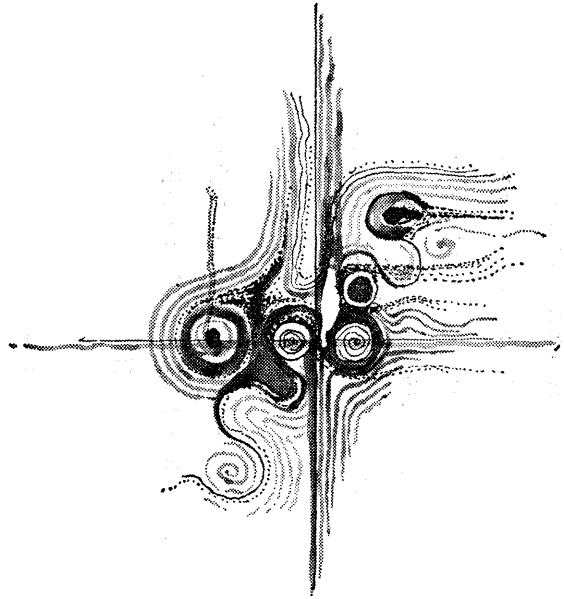
母親たちも久しぶりに会って、いつもと変らずにみんなが一緒になれたことをよるこび合ったと、帰りがけに話してくれた。

しばらく互いに会わなかった後も、いつもと変わらないお互い同士として再会したいという願いは、だれの心にもあるのだろうと思う。いつもと変わらわずにというのは、前と同じ状態のまま出会うことではないし、同じ生活パターンを保ちつづけることでもない。保育

においては、子どもがエネルギーにみちている点でいつもと同じなのであり、子どもに应答する私共も、子どもによって生きた人間となりうることでいつもと変らないのである。母親たちの張りのある姿を見ると、夏休み中、子どもと一緒に取り組んで生活していただろう様子が想像される。

子どももおとなも、いつもと変わらずに、子どもによって原点に立ち返らされて、生きた人間となりうるならば、新しい学期も、保育の場は生命的に展開してゆくであろう。

(愛育養護学校)



## 北風と太陽

旅人のオーバーをどちらが早く脱がすことができるかをめぐって、風と太陽が競争する話があった。絵本で出会ったのが最初である。

北風がこんな姿をしているのだということを初めて教わった感じで、北風が口をとがらせて風を吹き出している絵のことがまだ記憶に残っている。

旅人の姿はいささか奇妙であった。北風が吹きつけている絵では旅人は帽子をおさえ、必死になって自分のからだを曲げていた。もちろん顔は見えなかった。

太陽が北風と交替し、旅人はオーバーを脱いだ。その絵は、意外にも日本人の顔ではなかった。あたたかいというよりは暑いといった顔つきで、顔の汗をぬぐっているその顔は、年寄りの人物に見えた。

その後、この絵を確かめたわけではないから、くわしいことはわからない。講談社の絵本だったような気がする。

北風と太陽が競ったのも変だった。あまり必然性がな